

【論文】

F・スコット・フィッツジェラルド

『偉大なギャツビー』について —— 読み手としてのニック ——

徳 永 由紀子

—

登場人物でもあり、同時に語り手でもあるニック・キャラウェイ (Nick Carraway) という人物の設定が、『偉大なギャツビー』 (*The Great Gatsby*, 1925) 成功の最大の要因であることは、多くの批評家の認めるところである。しかしその一方で、ニックの語り手としての能力、あるいは人格にまで疑問を抱く批評家もいる。ニックの語りは信用できない、というわけである。

例えば、R・W・ストールマン (R. W. Stallman) は、ニックを偽善者と決めつけ、ニックは語る際に「故意に省略をしたり、曖昧にしたり」し、「真相がカモフラージュされている」と指摘する¹⁾。また、ゲリー・J・スクリムジュア (Gary J. Scrimgeour) は、「読者は、出来事や彼〔ニック〕の性格について、彼の話しかわからないから、客観的な評価が困難である。読者が客観的になろうとすると、キャラウェイの語り手としての正直さ、人物としての自己認識を非難しなければならぬ破目に陥る」と述べる²⁾。あるいはまた比較的新しい例でも、スコット・ド

ナルドソン (Scott Donaldson) は、「ニックはスノップである」に始まり、彼は人間嫌いである、他人と感情的に関わることを避ける傾向がある、道徳的な基準や態度は模範的とは言えない、自分のことに関して必ずしも正直というわけではなく、しょっちゅう他人を誤解している、と欠点を数え挙げ、従ってニックは信頼できない語り手であるとす。しかしまた同時に同じ理由から「文句のつけ所のない語り手」でもある、と付け加える³⁰。さらに、フィッツジェラルドの手法と映画の手法との類似を指摘して興味深い論を展開しているフィーラー・ウィンストン・ディクソン (Wheeler Winston Dixon) も、限定されている筈のニックの視点が全知の作者の視点のようになること、例えばギャツビーの「内面の動き」など、ニックが知ることができる筈もないことまで知っていることに疑問を投げかけ、内容のある程度までは「ニック自身の想像の産物かもしれない」と述べる³¹。ニック自身が「大学ではどちらかという文学青年だった」(四頁)と白状していると言うのだ。

しかしこういった批評家たちは、『偉大なギャツビー』という作品がジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) の物語であると同時に、いやそれ以上に、ニック・キャラウェイの物語でもあるということを忘れている。ニックが語ろうとしているのは、短かいつき合ひではあったが、彼に強い印象を残したギャツビーという人物を、彼がどのように解釈して行ったか、ということであって、客観的なギャツビー像でも、本当のギャツビー像でもない。あくまでニックという一個人による一解釈である。

言わばニックはひとりの自由な読み手であって、ギャツビーというテキストをどう読んだか、その読みを彼は語るうとしていたのである。客観的な読みなどどこにもない。読み手の数だけ読みもまた存在する。ある意味では見聞違いの悲劇とも言えるこの作品の底には、人は見たいものを見たいようにしか見てはいないという、苦い認識が流れて

いるのである。本論の目的は、『偉大なギャツビー』の構造を分析することによって、読み手としてのニックの重要性を明らかにすることである。

二

ここでまずニックの設定を整理しておく。一九二二年春、二度と帰らないつもりで生れ故郷の中西部から東部へ出て来たニックは、偶然その隣に住んだことからギャツビーという謎の人物と知り合う。その夏、ギャツビーを始めとして、ニックのまたいところであり、ギャツビーが別れて五年後もなお思いを寄せるデイジー・ブキャナン (Daisy Buchanan)、その夫トム (Tom)、その情婦マートル (Myrtle)、その夫ウィルソン (Wilson)、デイジーの友人ジョーダン・ベイカー (Jordan Baker)、などとつき合う内に、彼は様様な出来事に巻き込まれ、ついにはギャツビーの悲劇を目撃し、そしてその後始末もする。秋も深まった頃、一度は捨てた筈の中西部へニックはまた帰って行くが、それから一年後、ギャツビーの名を冠した小説を書き始め、時間はさらに流れて、惨劇から二年目にしてその小説を書き終えつつある。

従ってこの作品は、まず作品の現在であり、ニックの執筆時である一九二三年から二四年、それにニックの回想の対象である一九二二年、さらには過去の過去とも言うべき、ギャツビーの青年時代、恋愛時代にあたる一九〇八年から一九一九年と三層の、あるいは、会話という手段によって、また回想形式の常として、過去における現在が現出されるから時には四層の、時間構造を持っている。しかし勿論、それぞれがきれいに分かれてはいるわけではなく、ある時は過去が現在を、またある時は現在が過去をと、互いが互いを浸蝕する複雑な構造となっている。

ところで、ニックが語るというこの形式は、一人称形式と呼ぶのが通説になっていて、確かに最終的にはニックの一人称視点にまとめあげられているからその通りには違いないが、実はこの作品には複数の視点が設定されている。ギャツビーを語るのはニックただひとりではなく、例えば、ギャツビーとデイジーの恋愛時代を語るジョーダン、第一次世界大戦後、復員してきた頃のギャツビーを語るマイヤー・ウルフシェイム (Myer Wolfsheim)、そしてギャツビーの少年時代、言い換えれば彼がまだジェイムズ・ギャッツ (James Gatz) であつた頃を語るギャツビーの父親、ギャッツ氏 (Mr. Gatz) など、言わば複数の語り手がいる。あるいはギャツビーと暗黒街との結びつきを暴露するトムも、さらにまたギャツビーのパーティにどこからともなく集まって来ては、姿を見せないあるじの噂をする人達も、その中に加えてもよいかもしれない。

確かにジョーダンを除けば、語り手と呼ぶには彼らの発言は語りの体裁を整えてはいないかもしれない。およそウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897—1962) の『アブサロム、アブサロム』 (Absalom, Absalom!, 1936) のような入り組んだ人物関係も、複雑な構成も、重厚な内容も持たないが、それでも複数の語り手がそれぞれ言わばギャツビーの断片を持っていて、ニックが、あるいは読者が、それらを繋ぎ合わせてギャツビー像を解明して行く、という基本の構図は、『アブサロム、アブサロム』における、クエンティン (Quentin) によるサトペン (Sutpen) 解釈にも通ずるものがある。

すなわち、ギャツビー像は初めから分断された形でしか提示されていないわけであり、一瞬のひらめきにも似て、断片が鮮やかな印象を残すことはあっても、当然のこととしてギャツビーの鮮明な全体像は捉えにくいことになる。あるのはそれぞれが捉えたギャツビー像であって、個人の数だけギャツビー像もまた存在することになる。

そして複数の語り手という点でさらに付け加えるなら、『偉大なギャツビー』という作品は単にギャツビーひとりの物語ではなく、登場人物それぞれが自分の物語を持ち、彼らはニックに語られるのではあるが、それぞれが自分の物語の語り手でもあり、言い換えれば何人もの「わたし」がいるわけであり、まことにかまびすしい状況を呈しているのである。フィッツジェラルドはこの作品において、それぞれの人物に自らを語らせることに成功している。

さて、『偉大なギャツビー』において、物語の展開の上で要となるような点、ギャツビーあるいは他の人物を理解する上で鍵となるような点は、ニックの想像、推測、あるいは主観的な判断という形で示されている。幾つか例を挙げるなら、例えば、ギャツビーがデイジーに五年振りに再会する場面で、

①彼「ギャツビー」はかたときもデイジーから眼をはなさなかった。いろいろ美しいものを見つけた彼女の眼に浮ぶ反応の程度によって、彼の家のあらゆるものを再評価していたのであろう。[I think...]。

(九二頁。傍点筆者。以下も同じ。)

②しかし彼は、いま言った自分の言葉に心を奪われているらしかった。[he seemed...]。その光の持っていた巨大な意義が、いまは永遠に消滅してしまつたと、ふと思ったのかもしれない。[Possibly it had occurred to him that...]。

(九四頁)

③別れの挨拶をしに近付いて行くと、ギャツビーの顔に困惑の表情が戻っていた。まるで、現在の幸福の本質についてかすかな疑いが湧いたかのよう。[as though]。(九七頁)

④その日の午後でさえ、デイジーが彼の夢を破つた瞬間があったにちがいない。[There must have been...]。(九七頁)

⑤彼女が何ごとか低声で彼の耳もとにささやくと、彼はさっと感動の色を見せて彼女をかえりみた。小刻みに震えながら波のごとくゆれるあの温かなあの声が、何よりも彼をとらえたのであろう。[I think...]。(九七頁)

あるいはギャツビーがスペリオル湖にヨットを浮かべていたダン・コウディ (Dan Cody) に初めて出会う場面で、

⑥その名〔ジェイ・ギャツビーという名〕はしかし、そのときよりもずっと前から彼の胸に描かれていたのだろうとぼくは思う
〔I suppose . . . 〕。(九九頁)

⑦コウディを振り仰いだ彼の顔には、必らずや〔probably〕微笑が浮かんでいたことだろう。〔I suppose . . . 〕。(一〇二頁)

デイジーが初めてギャツビーのパーティに姿を見せた夜、客も殆んど引き上げたあとで、

⑧彼はいろいろと過去を語った。それを聞いてぼくは——何かを取りもどそうとしているのだ、デイズィを愛するようになった
何か——おそらくは〔perhaps〕自分に対するある観念をでも——取りもどそうとしているのではないかと思った〔I gathered
that . . . 〕。(一一二頁)

あるいはギャツビーの過去に関して、

⑨おそらく彼は、できるだけだけのものを奪って退散するつもりだったのだろう。〔probably〕——しかし気がつくと、いつ
しか彼は、いわば、中世の騎士の、あの聖杯さがしの旅にのぼっていた。(一四九頁)

そしてギャツビーが殺されることになる日、電話がかかってきたら伝えるようにと言い残して彼がひとりプールに空
気入りマットレスを浮かべている時、

⑩ギャツビー自身は、〔デイジーからの電話が〕かかってきはしなないと思っていたのだろうとぼくは思う。それでかまわんとい
う気に彼はなっていたのではなからうか〔I have an idea that . . . 〕。もしそれがほんとうならばすでに彼は、住みなれた

温い世界を失ったような気がしていたにちがいない [he must have felt that...]. (一六二頁)

こういった例において、ニックは決して断定はしていない。ひょっとしたらギャツビーは初めて会ったコウディに微笑みなどしなかったかもしれないし、デイジーから電話がかかってはこないなどと、夢にも思っていなかったかもしれない。ニックはあくまで彼の想像力を働かせた、彼の推測を語り、あくまで彼の個人的な見解を述べているだけだ。確かに、別の可能性があるのかもしれないし、ニックは的外れなことを言っているのかもしれない。

そのうえ、曖昧な言い方をするのはニックひとりではなく、例えばニックに、彼の家でデイジーと再会したいというギャツビーの願いを伝えるジョーダンも、「あの人〔ギャツビー〕は、デイジーが自分とこのパーティにいつかふらっとやってくるのを半分期待してたんじゃないかな [I think...].」(一八〇頁)と申し、あるいはまた、マートルの事故の顛末を語るギャツビーも、「何もかも一瞬のできごとだったけど、わたしには、あの人〔マートル〕、ぼくたちをだれか知ってる人と思いがえて、言いたいことがあってとびだしてきたように見えました [it seemed to me that...].」(一四五頁)という言い方をする。

しかしこのことは、先に挙げた批評家たちの言うような否定的要素ではない。ニックはストロルマンの言うように、話をはぐらかしているのでも、真相を故意に隠そうとしていないのでもない。むしろ、きっぱりと断定することができないニックのこのためらいこそが、「多分」、「恐らく」と但し書きをつけざるを得ないニックのこの自信のなさこそが、『偉大なギャツビー』という作品の性格をよく表わしている。

そもそも『偉大なギャツビー』の世界とは、ギャツビーの夢が今にも実るかに見えながら、あと一歩というところ

で無残にも潰え去ってしまう世界である。登場人物たちの会話がたえず中断される、何ごとも成就しない世界、今少しで成就するかに見えながら、しかし結局は成就しない、「あと少し」(almost)という語が万事を支配する世界である。十全ということはあり得ず、常に何か欠けている。およそ百パーセントの確信などというものの持てない、推測でしかものが言えない、頼りのない不安定な世界である。だからこそ、しじゅうデイジীর「心の中のあるものが決断を求めて泣いていた」(一五一頁)のであり、彼女は「自分の生に形が与えられることを望んだ」(一五一頁)のである。生の捉えどころのなさ、あやふやさに最早耐えることができずに、確固としたものであるかに見えたトムとの生活を、デイジীর選ぶ。

先に複数の語り手が存在すると述べたが、ギャツビーの内面を語るのは(あるいは語れるのは)、やはりニックただひとりである。彼は自分の目と耳で直接観察したことを素材に、あるいはそれが不可能な場合には、他人から聞いたことを素材に、推測して行く。そこで、例えば青年ギャツビーの胸の内、あるいはデイジীর恋愛の顛末なども、ニックが直接観察できないものの部類にはいるが、ギャツビーの過去に関する情報の中でも、こういったギャツビーの内面に触れざるを得ないもの、言わばギャツビーの過去の内面とも呼ぶべきものの処理の仕方、興味深いひとつの特徴が見出せる。

すなわち、ギャツビーの過去の内面は、一九二二年にギャツビー本人がニックに語ったことを、二三年あるいは二四年に今度はニックが語り直す、という形で提示される。言い換えれば、一九二二年の時点では、ニックは「ギャツビー物語」の聞き手である。語り手はギャツビー本人である。それが一年後、ニックは「ギャツビー物語」の語り手に変貌している。フィッツジェラルドは、ギャツビーが自らの過去を振り返りながらニックに語ったことを、引用符

を用いてそのまま再現するという方法ではなく、ニックに推測させながら、ニックの言葉で、ニックに語らせる、という方法を選んだのである。

実際、作品の中でギャツビーは過去に関しては驚くほど寡黙である。ニックが語り続ける途中でギャツビーが口を挟む、という場面もあるにはあるが、全体から見ればごく僅かであり、これはむしろニックの語りによりはりをつけるためのアクセントのようなものである。あるいは、知り合ってまだ間もない頃、ギャツビーがニューヨークへ向う車の中で、家族のことや戦争のことをニックに語るという場面があり、確かにここではギャツビーの言葉がそのまま再現されている。ところがその内容は、ニックが「不信の笑いをこらえるのに苦労した」(六六頁)と云うくらい見え透いた嘘で固められている。それに対して、同じくギャツビーの過去に関する情報提供者であるジョーダンやウルフィエムやギャツツ氏の発言は、それぞれがニックに語ったそのままを引用符でくくって再現してある。

こういったことを考え合わせると、フィッツジェラルドは確かに意図的にギャツビーを黙らせ、代りにニックに語らせているのである。ニックの言葉で語らせるということは、ニックの解釈を語らせるということである。たとえニックがギャツビーの言葉にいくら忠実に語り直そうとしたとしても、そこには当然、個人的潤色がおこなわれている筈である。最早ギャツビーの語った「ギャツビー物語」ではなく、微妙に変化した、ニックの「ギャツビー物語」である。そのことを承知の上でフィッツジェラルドは何故、ギャツビーが語ったことをそのまま再現せずに、ニックに語り直させるという方法を選んだのだろうか。言い換えれば、ニックの、一九二二年における「ギャツビー物語」の聞き手から、一年後の「ギャツビー物語」の語り手への変身は、何を意味するのだろうか。

ところで、ニックが一九二二年秋に中西部へ帰ってから小説を書き出すまでのこと、言い換えればそれが、ニック

が聞き手から語り手へと変貌するまでのことになるが、その間のことは作品の上では語られてはいない。その間ニッケに何が起こったのか、どのような変化があったのか、彼が何を考え、何をしていたのかは不明である。わかっているのは、めまぐるしい一夏の経験に疲れ果てていたニッケが、一年ののちにはギャツビーのことを語り出す、ということだけである。

このニッケの中西部への帰還に関しては、西部人ニッケによる、東部ではすでに失われながらも、今なお西部には残る美德の再評価である、とする見方が一般的であるが、ノスタルジーという名の単なる現実逃避であるとも考えられる。後者の意見は、ニッケが彼にとっての中西部とは、「小麦でも大草原でも、消滅したスウェーデン人の町でもなくて、興奮にみちた若き日の帰省列車や、凍てついた夜の街燈や櫛の鈴、灯のともった窓の光を受けて雪の上に落ちる柵の環の影法師」(一七七頁)であると述べていることに基づいている。ニッケが帰って行こうとしているのは、現実の中西部というより「子供時代の思い出」^⑤だといふのである。しかしここでさらに重要なことは、混乱の中で救いを求めるように思い出されるニッケの「ぼくの中西部」とは、「ほんとうの雪」が舞う白い世界だということである。しかも時は夜である。ニッケの中西部は闇の中の白い世界として喚起されている。

ところでアメリカ文学においては、白には特別の意味がある。アメリカの惨劇を目撃した今ひとりの語り手、イシュメール (Ishmael) は、「白鯨の白さについて」と題された章において、様々な例を挙げて、何故白がアメリカ人を慄えあがらせるのかを説明しようとする。しかし彼は、美しいもの、高貴なもの、神聖なもの、高潔なもの、無垢なもの、象徴であると同時にまた無気味なもの、おぞましいもの、ぞっとするもの、邪悪なもの、象徴であり、「色ではなくて色の無いことを見た状態」であると同時にまた「あらゆる色の凝集したもの」であり、「寂たる空白」であ

ると同時にまた「意味の満ちたもの」である、本質的に捉えどころのない「白」の呪文を解けないまま、これら「全ての事態の象徴」である白鯨、モービー・ディック (Moby Dick) を、船長エイハブ (Ahab) の命令のもと、まさしくアメリカという国を象徴する捕鯨船、ピークオド (Pequod) 号の船員たちとともに追うのである⁽⁶⁾。

『偉大なギャツビー』においても、白は何度もくり返し使われる——ギャツビーを拒絶したイースト・エッグ (East Egg) に聳える、豪壮な白い邸宅。ギャツビーを裏切るデイジーの白い顔、白い服、白い車、真珠の首飾り。自分を守るためには平気で嘘もつくプロ・ゴルファー、ジョーダンのやはり白い服、白粉をはいた陽に焼けた手。そしてふたりの「美しい白い」娘時代。ギャツビーを始めとして、フィッツジェラルドの主人公達を破滅へと誘う「黄金の娘」たちが住むのは、「白亜の宮殿」。リアリスト、トムは取りつかれたように白色人種の危機を訴え、そしてニックにとって、二年を経たのちにも悪夢の内に蘇える東部は、エル・グレコの描く歪んだ夜景のようであり、その中でどこの誰ともわからない、白いイヴニング・ドレスを着た泥酔した女が、担架に乗せられて当てもなく運ばれて行く——ここでも白は、美や富や憧れを表わしながら、しかしその下に冷たさ、空虚さ、破滅、腐敗を隠している、人を欺く不吉な色であり、特にデイジーの描写に多用されることは注目される⁽⁷⁾。

従って、ニックが戻って行ったのは、伝統的な倫理に守られた温かい安全な場所でも、現実から逃れるための逃げ場所でもなさそうである。ではニックは一体どこへ戻って行ったのだろうか。

こうは考えられないだろうか。冷たい白い雪に閉ざされた、闇に包まれた世界とは、間違いない死の世界である。ギャツビーが死んだ時、ニックもまた死んだのである。少くともニックのある部分は死んだ。ニックを乗せた帰省列車は、雪の舞う闇の中を死に向って走っていたのである。しかし一方で、ニックの頭に思い浮ぶ雪はクリスマス

である。神の子の誕生を祝う、そして万物を浄化する雪である。ニックの死はまた、誕生へと転じ得るものである。そう言えば、トムに正体を暴かれ、アメリカ版「神の子」(九九頁)、ジェイ・ギャツビーが「ガラスのように砕け散った」(二四八頁)あの一暑い日は、ニックの三十歳の誕生日であった。ギャツビーの死はまた、ニックの誕生をも意味していたのである。

ニックの中西部とは、従って「死」でもあり「生」でもある場、まさしく、「無色にして全色の」、無にして有の、「白」の世界としてイメージされる場所である。だから、白い世界から生還して来たばかりのニックは、「夏とともに生命がまた蘇えるのだという、あの何度か味わった確信」(四頁)を、まず語るのである。「ある夏の物語」の幕開きは、陽光が輝き、若葉の萌え出る、鮮やかな緑の世界である。

では一体何が、白い中西部にいたニックに聞き手から語り手へという、ギャツビーに対するより積極的な役割を選ばせたのだろうか。言い換えれば、何がニックの死から生への転換を可能にしたのだろうか。

実は、ギャツビーの過去をどのように語るかというその方法だけではなく、作品のどこで語るかというその配置にも、興味深い特徴が見出せる。すなわち、ギャツビーの過去に関する情報の配置は、ニックがギャツビーを理解して行く度合いに呼応しているのである。まずその配置から見て行くと、物語の上ではギャツビーは三回、ニックに過去を打ち明ける。一回目は先述したニューヨークに向う車の中、二回目はデイジーが初めて姿を見せたパーティのあと、そして三回目は全てが終わった(とニックは思った)あと、であるが、作品の上ではその順序に変更が加えられ、ニックが三回目聞いた話の内、時間的には前半の部分(ダン・コウディとの出会い、ジェイムズ・ギャッツからジェイ・ギャツビーへの変身の部分)が切り離されて、本来置かれるべき第八章ではなくて、第五章の冒頭近く、ギャツビー

とデイジーが五年振りに再会する場面(第四章)の直後に置かれている。これでニックによって語り直されたギャツビーの過去は都合三回、しかもきれいに時代順に、並べられていることになる。

また、ジョーダンの情報はギャツビーがデイジーと再会する数日前に、ウルフシェイムの情報はギャツビーの葬式の朝にそれぞれニックに語られ、内容から見れば最も早い時期に属するギャツビーの情報が一番最後に来る。すなわちこの三つの情報(あるいは語り)は、ニックが三回に分けて語るギャツビーの過去を真中に、その前と後とに配置されていて、ニックが語るのがギャツビーの内側であるなら、言わばギャツビーの外側を固めている格好になっている。

ここで問題となるのは、ニックの言葉に翻訳されたギャツビーの過去の最初の部分が、何故ギャツビーとデイジーの再会場面の直後に置かれているのかということであるが、ニックがギャツビーからまず初めて過去を打ち明けられた時、彼はギャツビーに対してそれほど関心もなく、その桁外れに豪華なパーティーには目を見張ったものの、むしろ失望さえ抱いていたのであり、従ってギャツビーの言葉はそのままの形で再現されていたと考えられる。言わばニックはこの段階ではまだ、ギャツビーの言葉を自分の言葉で語り直す労を取らない。ところがそのニックが、ギャツビーとデイジーの再会に立ち会ったのをきっかけとして、単なる興味本位からではなく、言わば本気でギャツビーに関心を寄せるようになる。得体の知れなかった、むしろ否定的に見ていたギャツビーが、少年のような反応を示すの間近に見た時、ギャツビーの上気がいつの間にかニックにまで伝わっている。ニックは感動を覚えたのである。だからこそ一九二三年の彼は、この場面の直後に、物語の時間の流れを無視して、青年ギャツビーの夢と野望を、今度は自分の言葉で語るのである。

そして続く場面も、ニックのギャツビー理解を考える上では重要なものである。スローン (Slone) という男とトムがある美人に連れられて、突然ギャツビーの所に現われる。イースト・エッグを代表する彼らが、中身のない空疎な言葉を使うのに対して、ギャツビーは言われたことをそのまま、歯痒いくらいに疑いもせず額面通りに受け取る。何代も続いた金持の上流階級であるデイジーやトムの属するイースト・エッグと、新興成金であるギャツビーの属するウェスト・エッグ (West Egg) との対立を浮き彫りにする場面であるが、今はその問題には触れないことにして、この時、傍らで一部始終を聞いているニックの内部で、静かながらもいよいよ確かな変化が起こっている。

すなわち聞き手から語り手へという、ギャツビーに対するより積極的な態度への移行は、ニックのギャツビー理解がそれだけ深まったことを物語っている。一九二二年の段階ではニックは、ギャツビーのことを認めているようである、しかし認めてはいない、という曖昧な態度を取り続け、やっと最後に、文字通り最後に、初めてギャツビーに賛辞を贈る。「あいつらはくだらんやつらですよ。あなたには、あいつらをみんないっしょにしただけの値打ちがある」(一五四頁)、と。しかしその後さらに一年、彼は当時のことを思い出し、情報を整理し、推測を重ね、自問自答をくり返して、ギャツビーという人物を解釈して行ったのである。彼の白い中西部で、作品の上では空白の一年間、語り手不在となってしまった「ギャツビー物語」をニックはひとり黙々と読んでいたのである。そして、先に挙げた例に過去時制と現在時制があることに示されているように、一九二二年の読みに、時間の経過とともにさらに新たな読みを加えて、彼なりの解釈を得た時、ニックは語り出す。イシュメールがそうであったように、悲劇の語り手を引き受けるというまさにそのことによって、ニックもまた白い世界から生還することができたのである。

しかもニックは、ギャツビーの内面を語りながら、なお一層ギャツビーとの距離を縮めて行く。ギャツビーを語る

ことによって、ニックはギャツビーに成るのである。特にギャツビーの過去を語り終える時が近づくにつれて、その度合は増して行くが、それでもまだその段階では、ニックはあくまでギャツビー本人の口から聞いたことを素材に想像力を働かせている。そしてギャツビーの過去を全て語り終え、いよいよウィルソンによるギャツビー殺害を語る段になって、ニックはこの小説の中でもまことに印象的な美しい一節を語り出す。

電話は一つもかかってこなかった。しかし、執事は、睡眠もとらず、四時まで待った——かりにかかったとしても、そのときには用件を伝えるべき人はとうにいなくなっていたのだけれど。ギャツビー自身は、かかってきはしなれど思っていたのだらうとぼくは思う、それでかまわんという気に彼はなっていたのではなからうか。もしそれがほんとうならば、すでに彼は、住みなれた温かい世界を失ったような気がしていたにちがいない。高い代価を払いながら、唯一の愛を抱いてあまりに長く生きすぎたと感じていたにちがいない。眼に映る木の葉も無気味なら、葉叢ごしに見上げる空も彼には常の空とは違って映ったのではないか。バラの花もグロテスクな存在なら、芝生に混沌の相をたたえ、そこに射す陽の光はまたいかにもまなましく、彼はさだめし身ぶるいしたことであろう。現実のものとは思えぬままに実質はそなえている新しい世界——そこには哀れな幽鬼どもが、空気の代りに夢を呼吸しながら、意味もなく動きまわっている——たとえば幻のような木立ちの中を、彼のほうにむかってすべるように動いてくる、あの人間の形をした灰色の妖怪のように。(一六二頁)

ここに至ってニックは初めて、全く純粹に彼の想像力だけに頼って、ギャツビーを語っている。ニックのギャツビー理解はここにおいて、その頂点に達すると言える。ついに彼は想像の中でギャツビーと一体化し、ギャツビーの内側から、ギャツビーの眼で外の世界を眺めているのである。

ニックのこの豊かな想像力こそが、彼とギャツビーとを結びつけるものである。ニックには想像癖、空想癖とも言えるものがあって、例えば、トムに連れられてウィルソンの店に初めて立ち寄った時、そのみすばらしい店は単なる

見せかけで、きつと二階に贅を尽くした部屋があるのだろうと想像してみたり、トムとマートルのニューヨークのアパートでひどく酔って、外へ出ようとはするのだが思うようには出られず、そこで街路から反対にその部屋を見上げている人物を思い浮かべてみたり、あるいは五番街を歩きながら魅力的な女性を選び出して、その女性とのロマンティックな恋愛を思い描いてみたりする。従って彼は、見えない筈のギャツビーの内面のドラマを読みとることができたのであり、「観念の子」ジュエイ・ギャツビーを誰よりも深く理解することができたのである。しかし、語り手という境位が如実に示すように、最も深くギャツビーを理解することができながら、そして限りなくギャツビーとの距離を縮めて行くことができなかったら、現実にはニックは決してギャツビーには成り得ない。そのニックの悲哀の色が『偉大なギャツビー』全篇を染め上げていると言える。

三

『偉大なギャツビー』においてニックが語っているのは、あくまで彼の理解したギャツビー像であるということとは、作品の構造自体が示していると言える。ニックの語るのが本当のギャツビー像であろうがなかるうが、どちらでも構わないのであって、ニックの個性、ニックの主観が反映しているところにこそ、言わばニックの色に染まっているところにこそ、『偉大なギャツビー』という作品の面白さもあると言える。そしてギャツビーというテキストを読むことによっては、むしろ読まれているのはニックである。彼が何にこだわり、あるいは逆に何を捨てるか、稿を改めて次に考えて行かなければならない。

テキスト

F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York : Charles Scribner's Sons, 1925)
引用文末尾の漢数字はテキストの頁数を示す。日本語訳は野崎孝氏の訳を使わせて頂いた。

註

- (1) R. W. Stallman, "Gatsby and the Hole in Time," in *The House that James Built and Other Literary Studies* (East Lansing : Michigan Univ. Press, 1964), P.134.
- (2) Gary J. Scrimgeour, "Against *The Great Gatsby*," in *Twentieth Century Interpretations of The Great Gatsby*, ed. Ernest Lockridge (Englewood Cliffs : Prentice-Hall, Inc., 1968), P.79.
- (3) Scott Donaldson, "The Trouble with Nick," in *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*, ed. Scott Donaldson (Boston : G.K. Hall&Co., 1984), P.131.
- (4) Wheeler Winston Dixon, *The Cinematic Vision of F. Scott Fitzgerald* (Ann Arbor : UMI Research Press, 1986), pp.28—9.
- (5) Robert Ornstein, "Scott Fitzgerald's Fable of East and West," in *Twentieth Century Interpretations of The Great Gatsby*, ed. Ernest Lockridge (Englewood Cliffs : Prentice-Hall Inc., 1968), P.59.
- (6) Herman Melville, *Moby-Dick or, The Whale* (New York : Hendrick House, 1962), P.193
- (7) Andrew Crossland ed., *Concordance to F. Scott Fitzgerald's "The Great Gatsby"* (Detroit : Gale, 1974) に拠れば、"white"の使用頻度は四十。他の色より圧倒的に多い。
- (8) Melville, *Moby-Dick*, p.193.
- (9) しかし、いくらニックの想像力が豊かであると言っても、例えば、何故ニックがデイジーの娘時代の内面まで語れるのか、あるいはマートルの事故後のウィルソンとマイカリスの会話を語るができるのか、という疑問が出てくる。デイジーの内面については、ひとつには、ニックがデイジーの眼で見るといふ場面がそれ以前に設けられていることから(第六章)、ニックはデイジーの内面も見ることができると考えられなくもない。またウィルソンとマイカリスとの会話についても、ちょうど同じ時間にウェスト・エッグではニックがギャツビーの話を聞いているという設定になっていて、ウィルソン＝マ

イカリス、ギャツビーニックという、二組の語り手⇨聞き手の関係が成立していることになり、さらにウィルソンはギャツビーの分身であると考えられることから、同じく聞き手の立場にあるマイカリスは、ニックの分身だと考えられなくもないが、『偉大なギャツビー』の視点に関しては、さらに考察が必要である。